

2019/08/29

倭文織のはるかな道

－そのルーツと現在

先崎 千尋

1. 人間にとって「衣」とは

倭文織についてお話しするのは2006年5月に岡山県久米町で話をして以来ですから、しばらくぶりになります。そのころまでに集めた資料のほかに、今日は改めて倭文織の研究課題、そして今後の展望についても話をさせていただきたいと思います。

1) 「衣」は何故最初にくるのか

本題に入る前に、衣、着るものについて、NHKの「チョコちゃんに叱られる！」ではありませんが、ふだんほとんど考えたこともない、当たり前だと思っている、その衣について最初に話をさせていただきます。

「衣食住」という言葉があります。衣、食、住は、私ども人間の生活に欠かせない3つです。何で「衣食住」と「衣」が最初にくるのか。今日のお昼に妻と話したら「よくわからない」と言っていました。「着る」ということが「衣食住」の最初に来るわけです。

私どもが生まれたとき、母親のおっぱいを飲むよりも先に産着で包まれます。人間として生まれて最初にかかわりのあるのが衣だということで「衣食住」なんだという説があります。「ホントかな」という気がしないでもないんですけども、とにかく私どもの生活に不可欠な衣です。

じゃ人間はいつごろから着るようになったのか、まとうようになったのか。

食は、動物であればどういう動物でも口に入れなければ死んでしまいます。人間も同じです。しかし、衣を身につけるのは人間だけなんですね。人類だけなんです。人類の歴史というのは500万年と言われておりますけれども、その中で裸のままの時代が長く続き、着るようになったのはいつごろなのかよくわかりません。遺跡でいろいろ出てくるのがありますが、一番古くて10万年ぐらい前と言われております。

2) 古代中世の記録

「衣」を考えるに当たって、レジュメの一番先に山上憶良の「貧窮問答歌」を入れておきました。この中に「襖(あさぶすま) 引き被(かがふり) 布肩衣(かたぎぬ) 有りのことごと 服襲(きそ)へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢え寒(こご)ゆらむ」云々とあります。

要するに『万葉集』の時代、倭文織もそのころあったわけですが、貧しい家の子どもは寒くて震えて眠れない。貧窮問答の歌としてこういう歌があります。

それからもう一つ、「おあむ(御庵)物語」を挙げておきました。これは庵に住む人の物語です。尼さんが庵に住んでいる、その人の物語です。戦国時代から徳川時代初期の、

父は300石ぐらいの侍でしたから、そんなにひどい生活の人ではありませんでした。その人が年取ってから語ったのが「おあむ物語」というんですけれども、この中に、13歳のときに、帷子（かたびら）ですね、帷子というのは裏地がないものです。多分、麻だったと思います。それを1枚つくってもらった。17歳——花も恥じらうではありませんが、そのころになっても1枚しかなかったということがこの物語に出てきます。徳川時代初期のことです。

別の本には、一生の間に3着しか着るものがなかったと出ています。貴族階級は別ですが、一般の庶民はその程度でしかなかった。要するに着るものが本当になかったんですね。人間にとって着るものが大事であっても、実際にはほとんど身につけることができなかった。新しいものを今みたいに買えないんですね。そういう時代が長く続いたんです。それが古代、中世の記録として残っています。

庶民の間にも着るものが手に入るようになったのは、江戸時代中期、まだ本当にごく近い過去のことです。衣の材料の中心は麻です。その後、木綿が入ってきました。綿は麻の10倍ぐらいのスピードで織れる。そういうことで木綿が普及した。しかも色を染められるわけですね、藍やそのほかいろんな色に染められる。その木綿が広く入ってきて、やっと我々の衣、着るという生活がまともになった。今申し上げたように、実はそんなに昔の話ではない。そのことに思いをめぐらせていただきたい。

3) 人類にとって最初の衣類は「毛皮」

改めて、人類にとって衣とは何だったのか。最初は毛皮だったようです。毛皮は当然、大きい獣を殺して、中を食べて、残った皮を身につけた。あるいは、アイヌの人たちは魚ですね。オットセイなんかもいたでしょう。「皮衣（かわごろも）」と言うんだそうなんですけれども、魚だとか鳥だとか獣の皮衣が最初だったと伝えられています。

4) 縄文の衣 編布（あんぎん）

それが下って、縄文時代から弥生時代に入って、我が国では「編布（あんぎん）」がありました。新潟県の秋山郷や隣の津南町、あそこへ行かれた方は多分見ていると思いますけれども、明治時代の初期まで編布がつくられていました。織るんじゃなくて編むんですね。どんなものなのか今日はお見せできませんけれども、俵や箆を編むのと同じです。おもしろをつけて、向こうとこっちへ交互に動かして編んだものをかぶっていた。「貫頭衣」と言いますが、手や足が出る部分はありませんから、丸くしてかぶっていた。それが我々の知るところでは最初の衣類だったと思います、獣や魚の皮衣の後は。

編布の材料は、これは後に触れますが、自分たちが手に入れられる材料です。きょうは後ろに園部満智子さんを取ってきていただいた苧麻（からむし）を置いておきました。他に藤、葛など、ところによって違いますけれども、栽培したものではない、それを使って編布も編まれていました。

青森県の三内丸山へ行かれた方は、あそこに編布がありますのでごらんいただいたかと思えます。尾関清子さんという、今名古屋にお住まいで、瓜連にもおいでいただいている方が編布を編んで、現代風といいますか、少しおしゃれな格好でつくったものが展示されています。

そんなことを、私どもの「着る」ということ「まとう」ということについての予備知識にして、倭文織の話を見せていただきます。

2. 古代の布—原始布

倭文織の前に言っておかなければいけないのは、「古代の布—原始布」のことです。先ほどもちょっと触れたように、私どもが身につける衣、これは植村和代さんの本によれば1万年前に織る機械を人間は発明した。最初の機械だというんです。500万年の人類の歴史の中でわずか1万年前に道具を発明して、織ることを覚えた。

では、その材料は何なのか。先ほども言ったように、私どもの身の回りにある材料を使った。当然、植物繊維が多いわけです。最初は「科布（しなふ）」と言いますが、これはこの辺にはありません。シナノキという木です。

それから、「藤」があります。現在は京都府宮津で織っております。

さらに「葛布」。葛もありますね。現在は静岡県の掛川で織っています。

それから「楮」。楮は「太布（たふ）」とも呼ぶところがあります。徳島県で、倭文織という名前ではなくて太布という名前で今でも織っております。「手しごと」の皆さん方はそこまで行って勉強してきたようです。

それから「大麻」、麻ですね。これは、今は麻薬の関係で許可をもらわないと作れませんけれども、麻が材料として一番ポピュラーだったと思います。栃木県の西方村というところで最近まで織っておりました。

それから「カラムシ」、苧麻ですね。後ろに現物を置いてあります。これもこの辺で、野生であります。福島県の昭和村が有名ですが、ここは栽培していて、冬、焼き畑で全部切って枯らして、そこから芽が出て、密植ですからずうっと長くなるんです。その辺にあるものを取ってきてということではなくて、栽培して織ります。

そのほか、自然に生えているものを使うというのはいろいろあるんですけれども、さらに動物性のものとしては絹があります。絹織物というのは中国が数千年の歴史を持っているんですけれども、我が国でも弥生時代、かなり古くから向こうから伝来したと伝えられております。

それから、きょう山方の菊池三千春さんがおいでですが、紙布があります。これは非常に高価なものです。紙が高い。和紙ですから。でも、昔は古いのをこよりに繕ってやっただから、今みたいな新しいものではなくて、もう使わないものを布にしたんだろうと思いますが、軽くて暖かいそうです。そういうものもあります。

あとは、東北地方では綿栽培ができなかったんです。綿に似たものは何なのか。ゼンマイなんですね。ゼンマイの綿毛、あれを繕って織っていたんですね。すごいですよ。

だから、女の人は、木綿が入ってきてからもそうですけれども、ずうっと長い間、家族の衣類をつくる作業に追われていた。それでも一生で3着しか着れない。そのぐらいに大変だった仕事ですね。今はこの原料は何だなんて考えない。たかだか何千円の話ですからね。そういうふうに考えると本当に信じられないような話なんですけれども、長いことそういう歴史をたどってきたと思います。

沖縄へ行けば芭蕉布というのがあります。ごらんになった方がいらっしゃると思います。

3. 「倭文織の源流を探る」

1) 瓜連町での調査のきっかけ

配布した資料の中に、私が「倭文織のルーツを尋ねて」という町の行った調査報告書を短くまとめたものがあるので、それをざっと見ていただきたい。

「倭文織」の調査研究を始めたのは1991年だから、もう30年近く前の私が町長だった時のことでした。ご存じの方もいらっしゃると思いますけれども、今はなくなりました堀口タクシーの飛田一雄さんという運転手が町長室に飛び込んできて、「大変な客を乗せた。瓜連駅から静神社まで、倭文織のことについて研究している人を乗せた」という話をしてくれました。

その方は崎山さんという、西宮市で『万葉集』の研究をしている人です。『万葉集』に倭文部の可良麿の長歌があります。それを調べるために静神社へ来たんです。飛田さんはその客を乗せた。その崎山さんが、兵庫県の淡路島の小学校で倭文織を織っているという話をしたというんですね。

そのときはどこかわかりませんでした。私は兵庫県の5万分の1の地図を買ってきて調べたら「倭文」という地名が出てきました。それは「しとおり」と読ませるんです。緑町倭文小学校、そこで織っているということがわかりました。小学校に電話をしたら、「はい、やっている」という返事でした。小さなミニチュアみたいな道具でやっているということなんですが、とにかくそれを見に行かなきゃと考え、私は別の用事があったときに倭文小学校に飛んでいきました。教育長にも行ってもらいました。

先を越されたなという思いがあったんですね。倭文織というのは我々のほうがずっと古いのではと。そのころは何も知りませんでしたから、先を越されたなという思いがあったんです。でも、後で調べると、そこだけでなく、全国各地に倭文神社、あるいは「しどり」という地名のところがありますから、倭文小学校でやったからといってどうということとはなかった。

それでは私どもは、古くから静神社があるし、倭文郷という村の名前もあるし、「倭文織だ、それを何とかしよう」ということで、調査を思い立ちました。

それを県の創生事業に応募して補助金をもらえることになり、この報告書をまとめたんです。『倭文織の源流を探る——倭文織のルーツ調査報告書』という本です。藤田稔先生、京都・川島織物の高野昌司さん、そして茨城県歴史館の齋藤真人さんに調査を依頼して、2年がかりでまとまりました。3人とも専門分野が違うものですから、ちょっとずつ違うような書き方をしております。

そのときに、この報告書をまとめただけでなく、私は、淡路島でやっているというならうちのほうでも織ってみようと考えました。たまたま、大学で同じクラスで、桐生に織物参考館・紫（ゆかり）という織物の博物館を持ち、そして織っている友人の森島純男君に相談して、機械を2台借りてきて、あのときは高機ですけども、桐生から指導者を呼んで織ったのが最初でした。今日おいでの園部満智子さんにふるさと創生事業の予算の中から桐生まで行ってもらって、実際に糸をかけたたり織ったりする勉強をしてもらいました。それがもう二十何年前の話ですね。

そういうことで報告書をまとめて、実際に織り出した。それが倭文織についての取っかかりです。

2) 報告書のあらまし

これから、私がまとめた「倭文織のルーツを尋ねて」からさわりの部分を申し上げます。倭文織誕生の背景としては、先ほど言ったように、動物の毛皮等々のことが書いてあります。それから、編布のことも書いてあります。そして、弥生時代に織物の技術が大陸から伝えられた。

そして、卑弥呼の時代の『魏志倭人伝』に「魏国へ倭錦を貢納した」と書かれています。

この倭錦についてはいろいろ話があるんですけども、川島織物の高野さんが再現したんですね。

養蚕については、筑波山麓に蚕影神社があって、この辺では川尻に養蚕神社というのがあります。海を伝わって常陸国に絹文化が入った。

それでは、その先の「倭文織の誕生」ですが、藤田稔さんが書いています。「瓜連地方には大和朝廷成立後、逸早く中央文化が伝わった。高度な織物技術も伝えられた。従来の原始布に改良が加えられ、新たにしづ織が生まれたと考えられる。なぜ逸早く中央文化が瓜連地方に伝わったのであろうか」云々ということで、朝鮮半島と上海付近、南のほうから九州に入って、それが海を伝ってこちらに伝えられた。そう藤田さんは推定しているわけです。

そういうふうはこの地方に最新の技術が伝えられた。それが倭文織だろうと藤田さんは推定をしております。

さらに、当時、「瓜連地方は久自国に属していたが、那珂川に極めて近い位置にある。従って、西日本からの先進文化が早く伝えられた。原始布の盛んであったところへ、先進技術が導入され、高度な織物としてのしづ織が誕生したのではなかろうか」と。

これに対して齋藤さんの考えは少し違う。果たして倭文織が楮なのか絹織物なのかかわからないというのが彼の前提なんですけれども、「朝鮮半島から出雲周辺の地方を経て、陸地を進み東国に及ぶ」という考え方と、「中国南部の貴州辺から揚子江周辺を経て黒潮の流れに乗り、太平洋岸にもたらされた」という考えがある、と書いている。

それから、河野辰男さんは、「久慈国造物部氏が、その領内の殖産工業を振興するために、中央からその技術者を招いた」と推定している。

4. あらためて「倭文織」とは

1) 素材

次に、倭文織とはどんな織物なのか。

『延喜式』にいろいろ出てくるけれども、結論は、楮とか、梶とか、カラムシとか、それを青、赤に染めて、文に織った布だと。それは『風土記』に出てくるからそういうことなんです。楮を赤だの青だのに染められるか。難しいですね、染めることは。だから、よくわからないんですが、青、赤に染めたきれいな織物だった、文織りだったと今まで説明されてきたんです。だけど、楮がそんなふうになんか自由に染められたのかな。木綿なら別です。私は今そう思っております。

ともかく、3人ともそれぞれ「よくわからない」という結論です。現物がないからよくわからないんです。

そこで「絹織物だという説がある」と書いておきました。絹織物はどこから出てきたのか。伊勢神宮の式年遷宮のお供えの一つなんです。お供えするものは千何百点あるそうですけれども、その一つに「倭文御裳（しどりのみも）」と書いてある。裳ですね。前掛けみたいなものなんですけれども、それが今、伊勢神宮の式年遷宮で使われているんです。それを織っているのは京都の住江という織物屋さんですが、その京都の住江織物が、いつごろからそれが織られてきたのかということ伊勢神宮に問い合わせをした記録があります。

それによると、意外や意外なんです、明治から大正、最近なんです。その前はなかった。これではなかった。あったかもしれない。

伊勢神宮というのは天皇家と深いつながりがあるお宮ですけれども、戦国時代、100年間ぐらひは、貧乏だったか戦国時代だったからかわかりませんが、式年遷宮が途絶えていたんですね。だから、その前のものが残っていたという確証はありません。社（やしろ）を動かす、新しくつくるといのはきちんとなっているようですけれども、こういう装束だとかお供え物をそのまま正確に残しておくというのは多分ない。今は、式年遷宮は20年に1回ですけれども、前のは20年間保存しておくんです。20年たったらそれは焼却——埋めるかどうか知りませんが消しちゃうんです。だから、その前はちょっとわからないんです。

そういうことで、間違いなくこれは伊勢神宮がそう答えていますから、ごく新しい模様です。そういう意味で「倭文」ということが出てくるので、高野さんに見せられたときにギクツとしたんです。「ありゃこれは認識がまずいな」という思いがちょっとしたんですが、そういう「倭文御裳」。

それから、徳川斉昭が集めたものの中にも「常陸国倭文地なり」と——これは川島織物にありますけれども、それも見せられました。やっぱり絹織物なんです。だから、倭文が楮なのか絹なのかということではなくて、むしろ使い方に特徴があると考えていいのではないかと私は思います。

2) 用途は

次に、倭文織の用途です。『延喜式』に「宮中などで神社の祭礼用、お祭り、儀式に使っていた」とあります。神事、祭り事に使われていたという可能性が極めて高いと思います。普通の人が使っていたものではないと思います。

きのう、きょうも九州のほうが大雨で、死者が出ていますけれども、天変地異、雷が鳴ったり、雪が降ったり、雹が降ったりする。昔の人は、何で起きるのかわからないから、神頼みじゃないけど、おまじないをしたり占ったり、そういうことでお宮をそれぞれつくったわけです。「倭文部」という織物の集団の人たちがつくった神社が「静神社」「倭文神社」「志鳥神社」、そういうふうに見えると思うんです。だから、倭文部を特別の集団としてあちこちに置いた。

その使い道は、帯や刀の柄のところ。そういうふうにして神事、あるいは呪事、まじないに使ったのだと私は思います。見ればわかりますけど、楮は麻よりももっとゴワゴワしていますから、いくら砧でたたいたってそんなに着られるものではない。あれを着たら血だらけになっちゃいます。

そういう意味で、日常に着るものではなかったと私は思います。だから、絹であっても何でもいいんですけれども、メインは楮、麻、そういうものが素材です。色を染めていたというのはちょっとわからないです。使い道は日常のものではなかったということだけは言えるんじゃないかと思います。

たまたま 1996 年、奈良県の下池山古墳——これは 3 世紀末、卑弥呼、『魏志倭人伝』のころですが、ここで出土した鏡の中についていたものが倭文織ではないか、そういう新聞発表が大々的にありました。色はブルー系ですね。これが倭文織だということを繊維学の権威である布目順郎先生が記者会見で発表し、論文にも書いています。

どこの学会でもそうなんですけれども、親分がそう言うとなかなか文句を言えない。布目先生がそう言っているものですから反論できない。恐る恐る「いや、これは違う」と何人かの人が言うておりますけれども、布目さんは「これが倭文織だ。新しく発見した」と主張していました。

これを再現した人もいます。先ほどの植村さんはそれを再現しています。「下池山」は絹織物です。

3) 衰退の時期とその原因

それから、駿河国と常陸国になぜ残ったのか。これも私の推測ですけれども、倭文神社は鳥取、伯耆一の宮から岡山県、淡路島、奈良、いろいろあるんですけれども、倭文織を織っていたと言われるところは大陸に近いわけです。そうすると、織る素材も織り方も最新のものが入ってきます。逆に駿河国と常陸国は、取り残されたというか、そういうものがすぐに入ってこない。昔からの織物そのものを織っていた。だから残ったんだと私は推測しています。

だから、自慢じゃないんです。逆にそれしか作れなかった。「いつまでお前らやっているんだか」と他の地域の人にはばかにしたんだろうと思いますけれども、朝廷や神社は神事に使うんですから、やっぱり大事なんです。そういう事情で、駿河と常陸の 2 国に「お前のところから出せ」と集めたんだろうと思います。

さらに、馬の鞍にも使いました。今でも信心深い人はいろんなことをやっています。身につけると安全だと、そんなお守りみたいな感じで倭文織を身につけていたのではないかと私は思います。

明石國助の『上代日本染織史』に、「静村の一大古墳中より完全に数種の麻織物が発見された事は我国で類例のない事実で、上代染織史には希有の史料である」。「記事によると……倭文織若しくは倭文織の一種である事は疑ひないと思ふ」と書いてあるんです。

一所懸命探したんですけれども、残念ながらこの新聞記事は今のところ見当たりません。私には見つけることができなかった。茨城新聞の古いのを見たけれども、わかりません。これが見つかるといいなと思っています。

その後のほうに「倭文織の成立は五世紀から六世紀にかけての頃であろう」とあります。要するに卑弥呼の時代からちょっと後のことです。

ご承知のように、静、下大賀地域は広範囲に古墳があり、古代の遺跡がたくさん残っています。静神社の東側から瓜連のあたりまでは、この前、歴史民俗資料館の講演会で県教育財団の川井先生の話をお伺いしましたが、遺跡、遺物の宝庫です。大きな集落もあったそう

です。

「権現塚」という古墳があります。前方後円墳です。あの古墳がいつできたのかというのはわかっているのでしょうか。大体3世紀から7世紀までを「古墳時代」と言うんですけども、その頃だと思えます。権現塚は、倭文郷、倭文部、この辺の部族の頭のお墓だったと考えられます。

あそこに、権現塚という前方後円墳だけでなく、「七塚」と我々は言っていたんですが、7つの塚があったんです。大きいもの小さいものが幾つかあった。すぐわきに「柳沢」という水が出てくるところがあったんです。水がないところでは人間は生きていけませんから、そういうふうにして恐らく古墳があったということから推測すれば、その古墳ができる前に倭文織がここで織られ始まった。そのことだけは間違いないと思います。

それを藤田先生は、5世紀から6世紀、西暦でいうと400年から500年ころだろうと言っています。終わりはいつなのか。平将門の時代には消えてしまった。もうそのころは織る意味もなくなっちゃったということもあるようです。なおかつ、荘園制から体制が変わって行って、「将門の乱」は言ってみればクーデター、反乱ですから、ヤマト朝廷の権威がここまで及ばなかった。だから「租庸調」を向こうまで納める必要がなくなってしまったということもあるんだろうと思います。

将門の時代にはもうなくなった。だから、500年ぐらいから織り始めて、せいぜい900年。最後のころはもうわからなくなっちゃった。どこかに書いてありましたが、倭文織の織り方が結城の紬のもとになっていると伝えられています。

配布した資料の中に地図がありますね。これをざっと見ていただきたいんですが、さっき言いましたように、全国で倭文神社や「しどり」はあちこちにあります。志鳥は栃木県にありますけれども、ここが東端です。西は倉吉まであります。これぐらい全国にあるんです。

この中で一番古いのは、奈良県の葛木倭文坐天羽雷命神社（当麻町）。「かつらきひとりにいますあめのはいかずちのみこと神社」、正式に読むとそういう名前の神社です。私はそこへ行きました。行って神主に聞いたら「わからない」と言うんです。何も資料が残ってない。

で、いろいろ調べたら、その神社は、もともとは「加守神社」、「かもり神社」なんです。明治時代にこういう名前になったと言うんです。不思議ですね。だからわからないのは当たり前なんですけれども、そこまで行って聞いたけれどもわからない。だから「おらほのほうがよく知ってるんだな」と思ったんですけれども、一番古い神社がこれだと文献では伝えられていても、肝心の神主は「知らない」と言うんです。

そのほか、これだけ全国にあるんです。すごいですね。

そして、グループ「手しごと」の皆さん方がもう20年以上前からおやりいただいている。すごいことだと思っています。

5. 新たな発見と疑問

1) 倭文神社が全国にいくつもあるのは何故か

ここから先は私の推定ですが、ヤマト朝廷の最初のころ、『魏志倭人伝』のころは、多分この国には100ぐらいの小さな国があったと伝えられております。それをだんだん今の

天皇家を頂点とするヤマト朝廷が征服、服属させて、領土を広げていった。北九州から近畿地方に入ってだんだん勢力を広げていった。倭文織という織物が、常陸国、駿河国だけでなく、全国のかなりのところで織られていたんです。倭文部という専門集団がいて、その人たちがそれぞれのところで織っていた。それを貢ぎ物として朝廷に納めた。税金の一種ですが、それでは、どうしてこの地にと考えます。静岡より北に倭文神社というのはないんです。

馬頭に静岡神社があります。でも、あの静岡神社は、徳川光圀が、八幡様だったのを静岡神社に変えたんです。だから、祭神は建葉槌命じゃありません。菅田別命（ほんだわけのみこと）です。光圀は、社寺大改革を行い、「八幡潰し」と言って、佐竹の氏神様である八幡様をつぶした。静岡神社にしたり、鹿島神社にしたり、吉田神社にしたり、この辺にそういう名前の神社がいっぱいあります。しかし、表札だけ変えて、中身の祭神は変えられなかったんです。おもしろい話ですね。表札だけ見て、それで「ごめんね」ということだったんですね。

馬頭の話はさておき、静岡社がわが国の一番北にあります。一番西は、伯耆国、今の鳥取県。一の宮は倭文神社です。その他、全国に十幾つあるんです。海沿いが多いんですけども、何でも、何でこの地まで倭人部という倭文織を織る専門集団が来たのか。「なぜ逸早く」云々と書いてあるんですけども、結局、ヤマト朝廷が蝦夷征伐をしていくその過程で、稲作も同じですけども、着るといことは一番大事なことですから、そういう意味で。そういう専門集団——しかも先進的な技術を持っているわけです。その人たちを派遣して、そこで織らせた、そう私は推定しております。

そういうことだと「なるほどな」と思っていただけそうな気がするんですけどね。この先の地に何で倭文神社がないのか。蝦夷をどんどん追い払って、最後は蝦夷地まで行くわけですけど、その過程で、もうここから先は倭文織を織らせる必要はなくなった。

そのころは、ずっと、藤原三代とか前九年・後三年の役とかあるんですけども……。ついでに言うと、今の安倍首相は、前九年で滅ぼされた安倍貞任の一族なんですね。負けて山口県へ逃げていった。それは本人が書いていますから間違いありません。だから安倍も蝦夷系だったと私は思いますけれども、とにかく、ずっとヤマト朝廷が蝦夷を追い払い続けて、ここから先、宮城県から岩手県に柵を置いた。そこへ行くころはもう倭文織というのはすたれちゃって、織る必要がなくなっちゃった。そんなふうに考えられます。だから、ここから先はないというのが私の推定です。

全てではないけれども、倭文という織物を織っていたところに神社がある。ないところもあります。この近くで言えば、栃木県那須烏山市に「志鳥」という地名があります。栃木市にもあります。ここには神社はありません。群馬県の伊勢崎市には倭文神社がありますけれども、栃木県にはないんです。だから、全部が全部、倭文を織っていたところにお宮があるかという、ないところもあるんです。とにかくほかの織物で、全国各地に神社がある織物はないんです。

長幡部神社というのが常陸太田にあります。「長幡部」も調べたけど、どんな織物なのかよくわかりません。現地には何もありません。だからわからないんですけども、長幡部神社というのがあちこちにあるわけではない。全国に十幾つか、倭文神社だけあるんです。不思議だと思いませんか。

例えば服部さん、「はとりべ」ですね。それから、渡部さんっているでしょう。芸能人（タレント）の渡部建、学者の渡部昇一。渡部は「渡り部」ですね。渡り部というのは船の船頭さんです、今で言えば。船は人を運ぶ。あるいは物を運ぶ。それが渡り部なんですね。それが渡部になった。渡辺も同じようです。

そういうふうに「部」がつく姓はそのほかにもいっぱいありますけれども、じゃ「渡部神社」があるか、「服部神社」はあるか。「倭文部」だけあるんですね。それは倭文という織物を神事に使ったからではないか、としか考えられないんです。

とにかく、報告書の中で、高野さん、齋藤さんは、それぞれ倭文の素材についていろんな可能性があるということを詳しく書いております。

それから、どんな機、織り機を使ったのかということもわかりません。ただ、下大賀遺跡の中では紡錘車が出てきていますから、多分このあたりで倭文織だけではなくて別の織物も盛んに織られていたということが証明できるんだらうと思います。

そういう意味で、倭文部の人たちは、要するに織物集団ですから、倭文織だけではなくて別の織物も織っていた。新しい文化、弥生時代の文化、文明をもたらした人たちの集団です。

2) 大甕倭文神社と富士宮市星の宮倭文神社の共通点

西は、話はあちこちになりますけれども、ついでに駿河国。これは、『延喜式』という平安時代の法律全集みたいなものの中で「駿河国と常陸国と2つの国から31端納めた」と出ているわけです。『延喜式』には用途も書いてありますけれども。納めたのは駿河国と常陸国と2つの国だけなんです。だから倭文織では最先端を行っているのかなと私はずっと考えていたんです。でもそうじゃなかったことが最近わかりました。

この話を受けて、駿河国、じゃどこで織っていたんだろうかと探しました。静岡市ではないですね。富士宮市というのがあります。富士山の南、白糸の滝とか、大石寺というお寺もあそこですけれども、富士宮市に星の宮倭文神社というのがあってあります。富士宮市の中央図書館に問い合わせをしたら向こうからいっぱい文献が送られてきましたけれども、富士宮市の倭文神社の周辺で織っていたことがわかりました。

ところが、富士宮の倭文神社で、香香背男命（かかせおのみこと）が出てきて、それをやっつけたとある。倭文神ですから建葉槌命です。香香背男命をやっつけたという話が出てくるんです。皆さんは、大甕神社は知っていると思いますけれども、正式名称は「大甕倭文神社」なんです。そこの拝殿に、建葉槌が香香背男をやっつけている彫刻があるのを見たことありますか。本殿か拝殿かどっちかにあるんです。見ることができます。静岡の話と一致します。

私は今まで神話というのは信じてこなかったんです。「何をばかな話」とは思わないけれども、何気なく「そんな話もあるな」という程度のことでしか受けとめてこなかったんですけれども、静岡の富士宮の話とこっちと全く同じ。これはばかにできないなと思ったんです。

その香香背男というのはどんな人なのか。これは「まつろわぬ民」です。ヤマト朝廷、ヤマト政権に立ち向かった、そういう人たちですから、ヤマト朝廷から来た人たちがやっつけたわけです。

「征夷大將軍」という言葉があります。徳川十五代将軍まで征夷大將軍だったんです。蝦夷を征服する大將軍。坂上田村麻呂とかがよく出てきますが、徳川時代になってもなお、蝦夷を退治するというのが幕府も含めてヤマト朝廷の大きな戦略目標だったんですね。だから「征夷大將軍」なんです。蝦夷というのは、まつろわぬ民のことです。

昔は、不破関、最近箱根の山からこっちが東国なんです、近畿地方から東は、野蠻、未開な人たちが住んでいると思っていました。ヤマト朝廷は、鉄と稲作と文字の3つを中国、朝鮮から持ってきたんです。前の天皇も「朝鮮から来た」と言っていました。その3つが弥生時代に縄文文化を追いやったわけですね。

縄文時代は、稲作なんかはほとんどなかった。結局、狩猟経済です。あるいは、あるものを取って食べるという採取社会。後れているんだか進んでいるんだかは別にして、のんびりした時代だったと思います。それを弥生文化はどんどん駆逐していったわけですね。その最前線基地として、最初は駿河国。富士宮のほうの話によれば、まつろわぬ民・香香背男は新羅国から駿河国に入ってきた、それをやつけたとあるんです。常陸国は、香香背男がどこから来たのかちょっとわかりませんが、やはり蝦夷ですね。

「あらえびす」という言葉があります。「えびす」にも3通りあるんです。上は「熟蝦夷（にきえびす）」、それから「荒蝦夷（あらえびす）」、最後は「都加留（つがる）」。青森県の津軽地方の「つがる」です。江戸時代の前は津軽地方まではヤマト朝廷の支配が行かなかったんですが、「熟蝦夷」は朝廷に従順で、「はい、はい」とその支配下に入った人たち。「荒蝦夷」は逆らった人です。まつろわぬ民・荒蝦夷はヤマト朝廷にずうっと逆らい続けて、「アテルイ」とかいうアイヌの酋長が殺されたという話もありますし、「蝦夷退治」の最前線基地としてこの地（静）があった。そう考えると何となく話がおもしろくなるんじゃないでしょうか。

それが今回この話をするために調べてわかったことです。

蝦夷はアイヌと同じかということについてもいろいろ説があって、「同じだ」というのと「違う」というのがあります。私にはどれが正しいとは言えませんが、ヤマト朝廷は、とにかく、東の国のまつろわぬ民を征服することを長いこと続けてきました。

次に静御前の話になるんですが、静御前は義経の愛妾と言われております。その静御前が、頼朝——兄貴になるわけですけど——の前で舞いを踊ったときの歌が、「しずやしずしずのおだまき 繰り返し むかしを今に なすよしもがな」なんです。

「しずやしず」はやっぱり倭文織なんですね。「しずのおだまき」ですから、倭文織に使った、糸を丸くしたものです。それを繰り返して「むかしを今に」というのは、義経と仲よくしていたころが今に戻らないかなと、簡単に言えばそういう歌です。

その「しずのおだまき」は慣用語みたいなもので、そのときに静御前が身につけていたということではなさそうです。でも、そのときまで使われていた。義経、頼朝のころから鎌倉時代ですよ。1200年よりちょっと前。だからずっと後のことなんです、そのころまでいろいろ歌の中には読み込まれていたということで、ここに挙げておきました。

それからもう一つおもしろい話をしますけれども、「東夷北狄」——「とういほくてき」と読ませます。これは古代の中国の言葉で、「西戎」「南蛮」と合わせて、異民族に対する蔑称です。わが国では、京都から見て東国に住む荒々しい武者のことを言っています。

ヤマト朝廷を中心にして「おれたちとは違う。未開の野蛮な人種だ」という意味なんです。が、明治になって明治政府は白河から北を「東北」と呼ぶようにしました。これは東京を中心とした東北ではない。「東夷北狄」を意味しているんです。幕末、維新のときに会津を中心に奥州列藩同盟を結び、薩長を中心にした勢力と争った。抗った。そのために明治政府は、「東夷北狄」を縮めて「東北地方」と言うようにしたんです。

仙台に「河北新報」という新聞があります。その「河北」は「白河以北一山百文」から採りました。明治政府は、「白河以北一山百文」——全部で百文だと言った。それで仙台の人たちは「河北」という字を新聞のタイトルにしているんです。それは明治政府に対する反抗、反発です。東北地方の人たちはまつろわぬ民なんです。

そういういきさつがあって、まつろわぬ民をやっつけながら、この地域の先祖は最前線基地として住んでいたと考えられます。

この間の川井先生の報告では、この地域にはかなり大きな集落があった。しかもそれは継続していた。中世の瓜連はこの辺の中心都市でした。東西南北の交点で、那珂川と久慈川の一番短いところにあるわけです。「塩の道」も通っていました。そういう意味で、静神社が常陸二の宮になったという意味も解けるのではないかという気がしております。

3) 倭文部可良麻呂の防人の歌

次は、倭文部可良麻呂についてです。

私はつい最近まで、倭文部の可良麻呂という人はこの辺の出身だと思っていました。皆さんもそう思っているんじゃないかと思えます。先ほど大甕倭文神社の話をしました。あそこの石名坂の上のあたりに「可良磨坂」「可良磨台」という名称が残っていて、一度私はそこに案内されたことがあるんです。可良磨坂、可良磨台がいまだに残っているということは——さっき言いました大甕倭文神社に由来する。そうすると、倭文部はこの人ではなく、大甕倭文神社のあたりに住んでいた。そこから防人として九州に行った可良磨さんにちなんでつけられた可良磨坂、可良磨台ではないのかと考えるようになりました。

誰もそういうことを言いません。私が今回調べてみて、この地域ではない、向こうのほうじゃないか、そんな気が今しております。

4) 下大賀遺跡の発掘

今、那珂市歴史民俗資料館で「那珂市埋蔵文化財出土品展」が開かれています。この中に、下大賀遺跡から発掘された「倭文田長」という墨書土器が展示されています。それから、「馬長」と書いてあるのも下大賀から出ています。井坂新聞屋のすぐ隣から出てきたそうです。

ということは、この倭文は、倭文部ではなくて田長ですからね。田んぼというのは、発掘現場から見れば、すぐ下は久慈川、玉川です。要するに下大賀の台地の下、そこで倭文郷の人たちが田んぼを作っていた。稲作は弥生文化の象徴です。田長はその長です。倭文部ではないけれども倭文郷の田んぼの長のことだと私は受けとめました。これは平安時代の初めのころのものだそうです。

馬長は、物を移動する馬の陣屋があって、そこに頭がいたということなんだろうと思います。集落があり、稲を作り、モノを動かす。そういうところがこの地域だと考えていま

す。

昔の文書には「倭文郷」と出てきます。倭文郷というのは、南側は那珂町戸崎まで。瓜連と古徳。中里は違うんです。それから旧静村です。下大賀、下村田、上村田、石沢、上野村の下岩瀬、上岩瀬、これが倭文郷なんです。玉川沿岸と久慈川のこちら側の地域になります。倭文郷では倭文織も織っていたし、田んぼも作っていた、用役のための馬も置いた。交通の要所でもあった大きな集落だったと考えていいんじゃないかと思います。

6. 倭文織の復元

それからその次に、植村和代さんのことを話します。

『織物』という本を法政大学出版局から出しておられます。この中で「幻の織物 倭文」について書いています。私はこの本を見て、ぜひこの人に会いたいと考え、出版社経由で手紙を出しました。来週9月6日にこちらへ来ていただくことになりましたので楽しみにしているんです。

植村さんは、先ほど紹介した下池山古墳で発見されたものを再現した人なんです。現物があるんですけども。ただ私みたいにしゃべっているだけではなくて実際にやっている人ですから、すごいなと思います。帝塚山大学という奈良にある大学の先生をしておられました。お会いできるのを楽しみにしておりますし、これから一緒に仕事ができればいいなと思っております。

倭文織の復元について、ここでもやっております。それから、最初にご紹介した、今は南あわじ市倭文（しとお）小学校です。けさインターネットで調べたら、児童数が83人だそうです。本当に家族的といいますか、昔の小学校の規模です。そこで今でも倭文織を織っていて、そしてフェスティバルに出て実演をしたり販売したりしているというのを、倭文小学校のホームページで見られます。

それからもう一つ、岡山県津山市倭文地区。ここは「しとり」と読ませます。これもネットで調べたら、今、NPO法人「倭文の郷」になっております。ここではいろんなことをやっているんですけども、ここは最初に筒塩さんという学校の先生だった人が熱心で、私はそこに行って講演してきたし、向こうからこちらに来てもらっていますけれども、向こうでも織っています。それがネットで見られるので、関心がある方は見てください。

そして、瓜連でやっているグループ「手しごと」の皆さん方。

現在のところ、倭文織を復元しているのはこの3カ所だと思います。私は、この3つの地区のその後の成果を含め、足跡を改めてたどり直してみたいと思っております。先ほどの植村先生が倭文織について本を書かれていますから、植村さんが中心になって倭文織全体を整理してもらい、さらに、この倭文織というのはどんなものだったのかということそれぞれの地区から書いてもらって、それをまとめられればいいなと思っております。

植村さんの本を読む前は自分一人でまとめようと思ったんです。だけどそれよりも、各地の事例も含めてまとめたほうが厚みがあると今は思っております。（了）